

⑤ 中谷彰宏 著

『なぜあの人は仕事ができるのか』

(ダイヤモンド社)

仕事ができばきできる人ってうらやましいですね。本書では仕事ができる人の69の習慣が紹介されています。例えば「変化を楽しむ」、「笑いながら考える」、「今できることを探す」、「すぐ仕事ができるように机の上をかたづけろ」etc…。何とか、今日からすぐに実践できそうなこともありますね。

「笑いながら考える」とは、どういうことでしょうか。これは別に、ニヤニヤふざける訳ではありません。それはつまり…本書を読んで納得してくださいね。

159-Nak (N.T.)

⑦ 宮木あや子 著

『雨の塔』

(集英社)

小さな純粋な望みさえも持てず、人形のように生きることを強いられ孤島にある女子学園に島流しされた4人の少女。「外の世界」で何が起きているかなんて彼女達は知る必要もない。ただただ自分たちを捨てた人間にもう一度必要とされる時がくるのを待つだけ。冷えたトゲの刺さった心に感情が芽生えはじめ人形のままでいられなくなった彼女たちは、めったに晴れることのない湿った孤島でそれぞれがトゲの根源に気づきだす。

大正時代の雰囲気強く感じさせる百合小説です。

913.6-Miy (C.M.)



⑥ 榎原英資 著

『日本人はなぜ国際人になれないのか
— 翻訳文化大国の蹉跌 —』

(東洋経済新報社)

私たちが使っている言葉の多く(特に社会・真理・理性などの抽象語)が、実は明治以降に作られた翻訳語です。異民族に征服されることなく独自の文化を築いた日本人は、翻訳により外国文化をも「日本化」して、かつての中国文明、近代の欧米文明をすばやく吸収してきましたが、一方でこの翻訳文化は、日本人の異文化を本来の意味で理解する能力を衰退させたのです。

本書では、日本人が国際社会で存在感を発揮できない理由はこの歴史的背景にあり、経済・産業・文化大国である日本が、今後、国際的に発信するにはいかにすべきか説いています。

著者は歯切れのよいコメントで有名な榎原英資氏です。

361.5-Sak (Y.S.)

⑧ ピエール・バイヤール 著 大浦康介 訳

『読んでいない本について
堂々と語る方法』

(筑摩書房)

フランス人は自分が読んだ本について批評する(あるいは求められる!)ことが好きである。「デカルトの未裔」といわれるフランス人が本を読まずにコメントするという手の内を明かすようなハウツー本を書いたことには驚きであるが、著者自身「本をあまり読まない環境に生まれた」ということは、つまり知識階級出身ではないこと、教鞭を執るパリ第8大学という自由な気風の中にいるからこそ成し得たのかもしれない。博識を誇りながら実は日々ネタ作りに苦心している愛すべきフランス人の姿が垣間見える一書である。

019-Bay (A.U.)